母への遺書

LETTERA
ALLA MADRE
SULLA FELICITÀ

フィレンツェ
連続殺人事件の真実

アルベルト・ベヴィラックア
大久保昭男＝訳

河出書房新社

母への遺書

LETTERA
ALLA MADRE
SULLA FELICITÀ
第工业学院图书馆
藏书章

Alberto Bevilacqua:
LETTERA ALLA MADRE SULLA FELICITÀ
© 1995 by Alberto Bevilacqua
The Japanese translation rights arranged with Alberto Bevilacqua c/o Ute Körner Literary Agent, Barcelona, through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo.

母への遺書 ——フィレンツェ連続殺人事件の真実

©1997 Printed in Japan

1997年2月15日 初版印刷
1997年2月25日 初版発行
著 者 アルベルト・ベヴィラックァ
訳 者 大久保昭男
装幀者 渋川育由
発行者 清水 勝
発行所 河出書房新社
東京都渋谷区千駄ヶ谷2-32-2
電話 (03)3404-8611〔編集〕 (03)3404-1201〔営業〕
振替 00100-7-10802
印 刷 中央精版印刷株式会社
製 本 大口製本印刷株式会社
定価はカバー・帯に表示してあります
落丁・乱丁本はお取替えいたします
ISBN4-309-20281-0

母への遺書

――フィレンツェ連続殺人事件の真実

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

息子、ベヴィラックァへ送る母の言葉より

「幸福、本当の幸福というものは、かえってそれとは反対の不幸な情況に置かれた時に生まれるものなのよ」

「世間全部が敵意を剝き出しにしているような時でさえ、人は幸福でいること、それを失わずにいることができるものなのよ……」

「どんな時にも忘れてならないのは、『微笑の心』ね。その心で、どんな悪意にも攻撃にも打ち克てるの」

「気をつけなさいよ。幸福はすばらしいもので、しかも思いも及ばないほどいろいろな形をしているものなの。でも、用心が必要なのよ。……幸せに満ち満ちて、クリスタルの輝きがお前の目を眩(くら)ませるような時、あまりに自信をもって幸福を扱ったり、惧(おそ)れの心を忘れたりした時に、幸せは壊れてしまうかもしれないのよ」

世界を震撼させたフィレンツェ連続殺人事件の犯人「怪物（モストロ）」という、思いもよらない汚名を着せられた作者は、心中密かに死をも覚悟して、母から教えられたこれらの言葉を思い起こしながら、母に宛てた遺書ともいうべき手紙、長い長いモノローグ、祈りにも似たモノローグを書きつづった。イタリア語の原書名は「幸福についての母への手紙」という意味である。「不幸についての……」と書くはずのところを、逆説的に「幸福についての……」としたのも、幸福についての母のこの教えがあったからである。

訳　者

私に降りかかった驚くべき事件の三つの過程を通じて行われた、数多くの対話の中の一つから――

「私は今幸福というものを知りつつあるのです。これは本当です。幸福とはどういうものか、最も辛い時期にあってもどうすれば幸福でいられるか、あらゆるものを明るくし、あらゆる困難に打ち勝つ力を与えてくれる深い幸福とはどんなものか……」

「そう、あなたの言っているとおりで……」

「そうですね」

「しかし、分っておいでですか？　あなたが受けた迫害のはじめの二つの過程では、あなたは何ひとつ悪いことなどしていないのに、手ひどい中傷と誹謗を受けたのですよ……。どうして笑っていられるのです？」

「それは、人生とはまことに奇妙なものでもあるからです。あなたのおっしゃった言葉は、カフカの『審判』の中にも出てきます。お二人の教養に敬服します、おそらく意図しないものでしょうが」

「あなたは笑っていてはいけません。私たちの言うところを受け入れて、第三の過程に打ち勝つ力を持たなければなりません」
「私のは自分の力から来る笑いなのです。でも、お分りにならないでしょう」
「あなたを精神的にだけでなく肉体的にも打ち砕いてしまおうとしている人びとがいることは、私たちも知っています。私たちとしてそれは当然のことです。でも、隠れた迫害者たちがあなたを殺そうとたくらんでいることを知っているのですか？」
「知っています」
「あなたの恐怖（テロル）も分っていますよ……」
「恐怖ではありません。それとは別のものです……。不安です、そう、私にとっては初めてのものです」
「死ぬことへの？」
「いえ、不可解な闇への不安です……。私の迫害者たちが潜んでいるその闇への」
「特別に親しくて、身近にいて、この異様な時期をともにしているような人は誰もいないのですか？」
「身近にいるということは理解するということです」
「そのとおりです」
「そう、いないことはありません。しかし、分ってもらいたいからといって迷惑をかけるようなことは誰にもしたくありません……。私のような場合で最もやりきれないのは、私に好意も持っていて、絶対的な信頼すら寄せてくれそうな人びとに対してさえ中傷の汚染が広がっているのを知ることで

す」
「両親はご健在ですか？……父上は？」
「父は二年前に亡くなりました」
「母上は？……ご健在ですか？」
「はい、健在です。しかも、しっかりしているのです。微笑というものを教えてくれたのも母なのです。これはきわめて有効な武器ですよ。それに、繰り返しますが、どうやって幸福というものを識るか、世間が敵意をむきだしたときにもどうやって生きるかを教えてくれたのも、母なのです。それゆえ、いずれにせよ――あなたには信じていただけないでしょうが――幸福はこうした日々を私と分かち合う唯一の友なのです……」
「で、母上には、とにかく、何でも話せるのですね？」
「もちろんです。それも、最もよい仕方で。つまり、私の流儀で……」
「つまり？」
「今の迷宮（ラビリント）の中で、『アリアドネの糸』になってくれるだろうということです」
「やはり分らないところは残ります。しかし、あなたを守ることは約束します。あなたが殺されないようにするために、我われにできるあらゆる手段を講じます」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章

母さん、久しぶりに手紙を書きます。何年ぶりか、それも長い年月。この前、便箋を前にし、「母さん……」と書きだした日から、長い年月が経っています。それでも、母さんの誕生祝いの手紙の中で、それもわずか数行の簡単な葉書の中でも、私は味けなくたわいのないマンマという呼びかけではなく、いつも母さん、と書きましたね。母さんの名前を書くことも決してしませんでした。

母さんに捧げたたくさんの詩の中に同じような部分がありました。

一番気に入ってくれたあの詩を今も憶えていますか？

なつかしい母よ、毎日毎夜、私はあなたの思いの中にいるのですね。

母よ、静かな雨の日にポプラ並木の下を歩む時、あなたは息子を思うのですね。

私も、時の流れに漂いながら、いつもあなたを思います。

母よ、あなたがポプラ並木の下を歩む時に出会う風の音のように、私はいつもあなたのそばにいます。

私たちに悲しむ理由はなかったのかもしれません。私とあなたは一つなのですから、一つにとけあう二つの声のように。

イタカの島に帰り着くことを夢見て果てしない旅を続けたオデュッセイアのように、私もあなたのふところに帰る日をいつも夢見ているのです。

それでは、私がほんの十三歳の時に母さん宛てに書いた最初の詩は？　ぜんぜん聞いてくれようとしませんでしたね。私がそれを朗読し始めるとすぐ、手を振って聞きたくないというしぐさをしました。私が自分の死を詩の形で表現することさえ、母さんはいやがりました。気味の悪い虫かなんぞのように、手でそれを振り払いましたね。その詩は、「母さん、ぼくは胎内に戻りたい、誇らしげに、しかも惨めな気持ちで、そこで安らかに死ぬために、生まれたときのように」というものでした。

私がある新聞社の社会部で働くことになり、スーツケースひとつを提げてパルマを発ってローマへ出た時に、私は最初の手紙を書きました。あの時、パルマの駅まで送ってくれましたね。あの日のことは、時間まで正確に憶えています。まだ朝の六時でした。熟した果物のような夜明けの光が空に広がっていく時刻で、広い野原の果てまで続くぶどう畑と、ぶどうの房までが見えていました。朝の光を受けて、母さんの髪はひどく白く見え、顔には優しい悲しみの表情が浮かんでいました。

ホームに立って、線路の信号が青に変ったのを見た時、私は、それまでの母さんとの生活すべてが、あの時母さんが肩にかけていたショールのように背後に流れ去るように思ったのでした。私を気弱にさせまいとして必死にこらえていたためか、母さんの目は、溢れ出てはこない涙でかすんでいるようでした。乗客の多くは仕事に出かけようという人たちで、だらだらと歩いて列車に乗りこみ、あれこれの世

間話に余念がない様子でした。口には、出がけに飲んだコーヒーのしみがついていました。

しかし、母さんはよその乗客のことなど見ていませんでしたね。たぶん、車両の窓から顔を出した私にじっと目を向けながらも、この私をさえ見ていなかったのでしょう。目がうるんでいたことのほかにも、母さんの目に私の姿が曇って見えたのは、二十歳の息子への気遣いと不安のためだったのでしょう。ともかく私は自分の人生の最初の冒険に挑むべく旅立ったのです。母さんはもう傍らにいない。これからの毎日は、母さんに守られながら自制していく必要はもうないのだという思いで、早くも私は開放的な気分になっていました。そして、母さんの筋金入りの楽観主義（オプチミズム）の裏に常につきまとっていた、決して揺るがないただひとつの否定的な確信のとおり、私は母さんの手の届かない気がかりな息子になっていったのです。その楽観主義（オプチミズム）とは——

「どんな形であれ陽気さを心に保つことができなければ、人生は崩れ去ってしまうことがあるの。精神が本来陽気なものであることを忘れると、その精神はゆがんでしまう。微笑の心だけがただひとつの解毒剤なのよ」というものでした。

母さんがなんとかして私に伝えようとした知的な陽気さというものを持ち続けることが、もしかして私にできたでしょうか？

母さんが私を産んだことにいくぶんかの罪の意識を抱いたとすれば、あの時だったのです。目を細めて私をもう一度しっかり見ようとして、母さんは私を渡り鳥を見るような目付きで見たのです。どこかの高いテラッスか電線に止まってしばらく翼を休め、どこともしれない、遠い未知の土地に向かってふたたび飛び立つ、あの渡り鳥を見る時のように。

母さんの生活の中にあって、私は一羽の渡り鳥だったのです。

母さんが手を上げたのはあの時でした。そして私は自分のすぐ目の前に、少し震える母さんの手を見たのでした。ちょっとした手品のように見えるそのしぐさに対して、私は微笑みかけました。実際、母さんの手の指は、小さな聖者像よりひとまわり大きいくらいの聖像画を、どこからかひょいとつまみ上げたかのようでした。それは、今日のこの日まで母さんの信仰でありシンボルだった聖像画で、パルミジャニーノ（一五〇三―四〇年。パルマ出身の画家。初期マニエリスムの代表的作品を残した）作の「トルコの女奴隷」だったのです。母さんはこの聖像画をいつも衣服の中や、ふところやケースの中に大切にしまっていました。それはまるで、非常に恵み深くて、時の経過とともに胸の鼓動そのものになってしまった聖遺物かお守りのようだったのです。

私はおよそ身勝手な自分の幸せを確かなものにしようとして、母さんからそれを取り上げてしまおうとさえ考えたものです。しかし今からすれば、それは若者のいい加減な判断から出た、軽率で思慮を欠いた考えであったことが分ります。幸福は一連の外的な事情が重なって生まれるもので、これを私たちが左右することはほとんどできないのです。母さんが私の両手を一緒に握りしめながら私の掌中に聖像画を押しつけたのは――母さんのその手は冷たかったけれども――、幸福のシンボルであるこの聖像画が、人生の困難な折節、息子の援けになってくれるように、という母さんの切ない願いからだったのです。

母さんが敬虔に軽く唇をつけた「トルコの女奴隷」――私も手荷物預り所で儀礼的にそうしましたが――は、私にこう伝えているのでした――

「ここに描かれた顔、若い女性のこの顔は、幸福を表している。これに勝る生命力でもって微笑の感情を表現し、欲望に妖しく輝く目を備え、肉体の内部から滲み出る真紅の血を思わせる頬を見せ、青春たけなわの見事な優雅さを漂わせる人物は、いかなる絵画にも、いかなる写真にもかつて見られたためし

がない」

そして私は、自分の眼鏡の曇りを通しておぼろに見ていた母さんの目の中にも、その思いを読み取ったのです。

「幸福の感情は、ただ一つの貴重な財産なのよ。そしてそれは同時に、人生の苛酷な法則に弄ばれて、時には取り返しのつかない不運に見舞われた人が、自分のその人生に振りかざしかねないただ一つの凶器にもなるの。私たちは、つねにありふれていて、卑俗で、惨めな人生の悪よりも勝っているのです。なぜなら神――あるいは、大いなる存在がどのようなものであれ、それを神と呼ぶならば――は、その光とその本性に属する私たちに、選ばれたというまさに最高の感情を与えて下さっているからです……。神は私たちを愛撫しながら、微笑という、この神の恩恵を受けた唇に興じておられるのです」

私は母さんのはっきりとした言葉を聞いたのです。

「我が子よ、しっかりと憶えておきなさいよ。幸福は、本当の幸福は、私たち自身の中から生まれるのだということを。そして、私たちにとってはとりわけ、その幸福とは反対のものから生まれるのだということを」

「トルコの女奴隷」、こんなに活き活きした母さんの一部分が、私のすぐ目の前の、仕事机の真ん中にあります。広い机の上には、他に何もありません。私にとって劇的な夜です。そして、広いローマの街も絶望に関わっているように思われるのです。

母さんと別れた日から私がひっそりと暮らしているこのローマにしては、異常な、怒り猛ったような

烈風が、窓ガラスを揺すり、まるでそれを打ち壊そうとするかのように攻めかかり、テラッスの植木鉢をひっくり返し、籐椅子や小卓をなぎ倒しています。

私は聖像画を手に取り、顔をそれに押しつけます。パルマを発った早朝、列車が動きだし、母さんの姿が消えたあの時にしたのとそっくり同じように。あれ以来、私たちはほとんど反対といっていいくらいの方向に向かって生きているのです。私の方は、未来というものがつねにそうであるように、当てどもない日々を、一方の母さんは、過去にまとわりつかれたような足取りで、地下道をくぐる小さな老女として。

「手紙を書くのよ！」と母さんはあの時に叫びましたね。

私はローマのわびしい下宿に着くとすぐに、母さんに手紙を書きました。

「母さん、すべてうまくいっています」

けれども、胸を締めつけられるような思いで。なにしろ、新しい自分の生活の何に対してもまだまったく立ち向かっていなかったのですから。

しかし、そっけなく、しかも偽りの自信を述べたあれがともかくも手紙と呼べるものだったのなら、私の生涯のこの最悪の夜に母さんに宛てて書き始めているこの手紙は、まるで別のものです。これは手紙ではありません。告白でもなく、なおさら日記ではないのです。あえて言うなら、遺書です。けれども、正確な意味での遺書とは言えません。そう、遺書には一定の形があります。遺書とは、死を予見し、いずれすべてが人びとに知られることを前提として書かれるものです。母さんがごみ溜めに投げ棄てるものだと言っていた浮世の規則――特にそれが不吉なものであれば――にしたがって、誰かの利益のために作られる書類です。ですから、私はどんなことについてであれ、決して遺言者などにはなりません。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com